

『奥の細道』小見(三)

板 坂 元

六、出発の前後をめぐって

明ほの、空麗々として月は在明にて光おさまれる物から不二の峯
幽にみえて上野谷中の花の梢又いつかはと心ほそし

周知のごとく奥の細道の出立の個所であるが、従来の注釈
に二三氣のついたことをつけ加えておきたい。元祿二年の三
月二十七日は太陽曆に換算すると五月十六日にあたる、『三正
綜覧』。したがって「明ほの、空麗々」という表現にあて
はまる時刻は、ほゞ午前五時前にあたるわけである。この点
については一見問題がないようであるけれども、この文を読
み進んで行くと、まだ夜も明けきらぬ時刻に芭蕉等が深川を
乗船したかのような錯覚を起しやすいし、そのように解釈し
た本もあるようである。しかし実際は、すつかり明けはなれ

た八時頃に芭蕉等は乗船したと思われるので、以下に簡単に
その根拠を示しておこう。

會良の随行日記によれば、深川を乗船した一行は巳の下刻
に千住に上陸したことがわかる。巳の下刻が現在の何時頃に
あたるかを正確に算出することは、會良の記載が正確な時刻
法によっているとは思われないので無意味であるが、ほゞ今
の十時半から十一時くらいまでの間にふくまれるであろう。
当時の時刻法はまちまちであつたことは例えば『地方史研究
必携』などを見てもわかると思うが、念のためにつけ加えて
おくと、当時でも天文方では一日を正確に十二等分した時刻
によつているが民間では慣習的な方法で、日出・日没をそれ
ぞれ明六つ・暮六つとして昼夜をおのおの六等分するという
方法をとつている。それも正確な計時法が普及していたわけ

ではないから、この場合も機械的に計算することはもちろん不可能である。また上刻の起算のしかたもまちまちであつて、大まかに云うと午の上刻を今の十一時にあたる時刻からする場合と正午からする場合のちがいはあつたようである。ここでは前者の場合をとつたが後者によれば巴の下刻はそれよりももう少し遅い時刻になる。

さて千住に到着した時刻がほど右のようなものであるとするならば、深川から乗船して遡江した時間を引き去れば、乗船の時刻は求めることができる。当時の船足がどれほどのものであつたか、また干潮満潮の条件を考え合せるとしても、深川から千住まで約二里の行程に明け方から十一時頃までかかるようなことは絶対にあり得ないことである。だとすると、夜もすつかり明けはなれた七時か八時ごろに乗船したと考へるのがもつとも常識的である。もちろん奥の細道は乗船の時を明記していないし、引用した箇所は旅仕度や親しい人々との別離を惜しむ一時であつて、心理的にはすでに旅人であつた芭蕉にとつてはごく自然に表現されたところであろうから、矛盾しているとか虚構であるとか騒ぎ立てる必要はないことだが、時々前にあげたような錯覚が注釈に表れたものもあるので贅言を加えた次第である。ついでながら芭蕉の旅立つた日太陽暦の五月十六日はもちろん初夏の候で、上野谷中の桜は咲いているはずがない。したがつて芭蕉の文は実景の桜ではなかつたわけである。また、この箇所が源氏物語帯

木の一節をふまえていることは昔から云われているが、単に「光をさまれるものから」の部分だけではなく、源語の後続する「影さやかに見えて」のところを「不二の峯幽に見えて」としたところまでふまえていると解すべきであろう。源氏物語の場合の情景とはいささか趣を異にした場面であるから、芭蕉はおそらく修辭の面のみでこの文をとり入れたのである。

最後に、在明について水間沾徳の『文蓬萊(元禄初年刊)に在明月 廿五六日頃より出る也

という説明がある。諸書に十六日以後の月とか下旬の月とかしているのは、この説によればさらに時間的に限定されなければならなくなる。当時の俳人達にはこれが常識であつたのか、あるいはそうでないから沾徳がわざわざ説明を加えたのか判然しないが、芭蕉の読んだにちがいない文献にこのような記事があるので紹介しておく。

七、その跡たしかならぬことのみを

昔よりよみ置る歌枕おほく語伝ふといへとも山崩川落て道あらたまり石は埋て土にかくれ木は老て若木にかはれは時移り代変して其跡たしかならぬ事のみを爰に至りて疑なき千歳の記念今眼前に古人の心を関す

壺の碑の個所のこの一文で問題になるのは「たしかならぬ事のみを」の助詞「を」であろう。諸書に接続助詞としている

のでもちろんよいと思うが、その説明に首肯しかねる点があるのとおりあげて見た。例えば松尾靖秋氏の『奥の細道精解』に「事のみなるを」の「なる」を省略した形。(中略)「を」は逆態確定の意の接続助詞。断定の助動詞「なり」の連体形に接続したもの。」とされているのが一般的な説である。(「なり」の省略された形乃至は「のみなるを」の意であるとして接続助詞とする点は、井本農一・広田二郎等の諸氏も同様である) 解釈

はこのままでも誤りではないが、形式上の文法の説明の際に意味を補つて語の機能を説明するのは如何なものであろうか。おそらく、接続助詞「を」が活用語の連体形につくということを念頭に置いて考えられたためにこういう説明をとらざるを得なくなつたものと想像されるが、省略された形と考えないで説明する方がのぞましいことは云うまでもない。

私見によれば体言につづく接続助詞はあり得る。用例をあげての考察は別稿に譲るとして結論のみを示すと、「ばかりを」「のみを」「ことを」「ひとつを」「ものを」等の名詞に助詞「を」がついた形で接続助詞「を」と考えられるものは資料に決して乏しくない。本来「を」は間投助詞であつたと云われているが、それが接続助詞の機能を明確に示すものへと分化して行つて、当然の結果として活用語につづく場合に限るような錯覚を起させる可能性をもつて来たのであるが、このような「を」を接続助詞として取りあつかうなら体言につづく場合を容認しても不都合ではないと思う。この場合もむしろ逆

に考えて「連体形十を」の形の連体形を体言相当格と考えて「体言十を」に近づけて理解する方が妥当であらう。したがつて上掲の場合も「なる」の省略された形という説明は不必要だと考えられる。なお、右のように考えて来るとあらゆる体言に「を」のつゞいた場合も存在しうるわけだが、後世には「のみを」「ばかりを」「ことを」等の限られた場合が多くなつていようである。

八、日光前後

會良の随行日記と奥の細道を比べると、両者の記載の間かなりの相違点が見出されることは、すでに諸家のことごとく指摘するところであるが、その中でも日光前後の箇所もその一つのいちじるしい例である。元祿二年にはなかつた三月三十一日という日附が奥の細道には認められ、しかもその三十一日の日附になつてゐる仏五左衛門に関する記事は會良の日記によれば四月一日日光参詣後に泊つた時のことである。つまり、四月一日の出来事を前日のこととして芭蕉が書いたことと、その日附を誤つたこととの二点が指摘されるわけである。これについてはすでに諸家の註に必ずふれられてゐるので、もはやつけ加えることはないようであるが、私なりの理解を左に略説しておきたい。

芭蕉が奥の細道を記述するにあつて、単に事実を忠実に記録するという態度ではなく、文学作品としての表現効果を考慮に入れて事実を狂げて書いたり、時には架空の出来事と思われれることまでつけ加えたことは、これまた諸家のあまねく認めるところであつて、特に俳諧師であつた芭蕉が作品全体の構成にあつて俳諧の付合のような発想によつたであろうということも動かしがたい事実であろう。奥の細道が歌枕の遍歴であり、単なる風光の美だけでなく、その風光の中に古人の感懐をさぐるという要素を一貫して持つてゐることは、いうまでもないが、それだけに終始せずさういつた歌枕的な場面の合間々々には世俗的な場面を点景させて変化と調和を与えようとしてゐる。日光の仏五左衛門、那須野のかさね、こゝろいつた系統の人物像はさういつた役割を果すために登場してゐて、奥の細道を多彩ならしめてゐる。おそろくこゝろいつた素材の組合せや配置は俳諧の付合の手法を念頭に置いたものであるが、当面の日光前後の場合はそのもつともよい例である。

奥の細道の記載の順序を見ると、室の八島、仏五左衛門、日光、曾良、那須の黒羽となつており、この部分では仏五左衛門の箇所のみが実際とことなつた順序になつてゐる。そこです、実際通りに仏五左衛門の記事を日光参詣後にもつて来るとどうであろうか。この場合は曾良の記事と句が五左衛門と並ぶこととなるし、諸家の指摘するように日光の記事の

中に異分子が挿入されることになり日光の記事の統一が乱れ文の緊迫感がいちじるしく削減される。そのために仏五左衛門の記事を除くか他へ移すことが必要になつて来たのである。曾良の記事は黒髪山と関連してゐるからここをはずすわけには行かないから。これは想像に難くないことであるが、それならば何故仏五左衛門というさほど重要でもない人物をわざわざ前日のこととして書き載せる必要があつたのだからかということを考えて見る必要がある。

前述のような記載順序を原文について見ると、室の八島のつぎの仏五左衛門を除くとするとすぐ日光の記事が直結することとなる。芭蕉はまずこの神祇に関する記事の重ねて出て来ることを避けたいと思つたであろう。しかも室の八島では曾良の言葉が長々と引用されているし、日光の箇所では曾良の句とその解説紹介が再び現れるといふことはいつそその気持を強くさせたであろう。そのため朴訥な人物を配置して変化のある文としようを試みたのではあるまいか。奥の細道を注意して読むと、前後の文の内容・形式に芭蕉は細心の注意を払つてゐることがわかるが、日光前後の事実との相違は右のような心的過程によつて成立したひとつの例であろう。つぎに三月三十日という日附を用いたことについて考えて見たい。これについては、志田博士の「卅日」は「此日」の誤写ではないかとの説があるが、この箇所に「此日」という語が来るのはいかにも不自然であつて、養成しがたい。芭蕉

は會良ほどに詳細に日附を入れた日記を持つていなかつたやうであるし、奥の細道の述作にあつて會良の日記を参照したとは思われない。試みに奥の細道で日附の明記してある箇所を抜き出して見ると左のようになる。

三月二十七日 出發

三月三十日 仏五左衛門

四月一日 日光參詣

五月一日 飯坂

五月四日 仙合(たゞし「あやめ韋く日なり」とあつて、日附は明記してない)

五月十一日 瑞巖寺

五月十二日 平泉

六月三日 羽黒山

六月四日 同 右

六月五日 同 右

六月八日 同 右

七月六日 酒田・市振の間(「文月や六日も」の発句による)

七月十五日 金沢

八月十四日 敦賀

八月十五日 同 右

八月十六日 同 右

単調な日記体の紀行文となることを防ぐために日附の記入をことさらに省略するという気持があつたかも知れないが、それだけではなく瑞巖寺・平泉のところと羽黒山の部分を除

けば朔日十五日乃至は特定の記憶しやすい日とその前後の日附以外は含まれていないので、手控風の句・文を書きつけたものぐらいいしかなかつたと見るべきである。例外的な羽黒山などはその句文に日附を明記したか、それを容易に思い出すことのできる個所があつたのであろう。また、日光前後の場合も、四月朔日だけはつきりとしていても、その前日が二十九日か三十日であつたかは基準となる四月朔日以外に日附が明記してある資料を持ち合せていなかつたことを裏書きするものである。その上、作爲的に事実を捏げて仏五左衛門の記事を前日のこととする意識が強く働いたために前日が二十九日であるかどうかを調べることをしなかつたのであろう。また、山崎喜好氏の指摘されたように、「元祿二年以後七月までの間に大の三月は元祿三年五年があり、芭蕉はたまたまこれらの某年に細道を書いていた為思い誤りをしたか」という可能性は十分にあり得ることだと思ふ(同氏『奥の細道新釈』三六頁参照)。もし三月三十日のある年に奥の細道が書かれていたとすれば、そういう錯覚はごく自然に成立したであろう。ただ、「みそか」という語が三十日という意味だけでなく、月の最後の日という意味に使われる習慣が当時あつたのなら、あなたが誤りとしてとり上げる必要がなくなるわけだが、注意して例を探していてもまだ望ましい例が見当らないので疑問として提出するに止める。

なお、日光のところに會良が黒髪山の句を作り、それに就いて會良が旅立つ曉に剃髪した云々のことを芭蕉が書いてゐるのは、疑問の存する個所で賛否まちまちであるが、私は虚構説を支持する。まず、元祿二年蕉門歳旦詠草中の「旧年名を改て」とある資料が諸書に引かれてゐるのは、それだけで「はもちろん確証とはならないけれども、會良の「剃捨て」の発句が随行日記にも書きとめられてゐないし、芭蕉が時として紀行のはじめの部分に同伴者の紹介を試みるものが認められるのは見過してはならないのではないかと思う。奥の細道の中の會良の句は随行日記に記録されていないものが多く、その限りでは他の同様な場合をあげてそれにはどういう原因があつたのか検する必要があるが、この日光の場合の句は會良にとつては重要なもので云ひ捨てにするような性格のものではなく、拙劣な句ながら「力ありて聞ゆ」と評語のあるものを紀行の一体として忘れ去るはずのものではあり得ない。また同伴者について言及する必要を芭蕉が感ずる可能性も十分にあり得るので、かたがた芭蕉の創作と考ふる次第である。黒髪山・衣更の素材からこの句を組み立てさらに「衣更の二字力ありて云云」の語句をつけ加えたことは無理な想像ではないと思う。

九、紙子一衣

「紙子一衣は夜の防ぎ云々」の「一衣」は古くから「ヒトエ」

「イチエ」の兩様の読み方が並行して行われていたが、仏教の「三衣一鉢(サンエイツパチ)」の読みから類推して「イチエ」と読む方が最近では有力となつてゐた。一という数字はルビをつけるまでもない字なので、用例がなかなか見つからないが、最近出版されたロドリゲス「日本大文典」(土井忠生博士訳)を読んでいたら

Ichije (一衣) 即ち、Pitotguno coromo (一衣) という例が見あつた。同書は一六〇四—一八八年刊であるから一六八九年の奥の細道とは時間的にへだたりがありすぎるが、適当な用例の見つかるまでは、しばらくこれを読みを推定する根拠としてよいかと思う。なお「ひとへ」と読むときの根拠は菊本氏本「奥の細道」に、この部分を仮名書にしてあるのによつてゐるが、『芭蕉研究 第壹輯』所収杉浦正一郎氏「伝去来自筆『奥の細道』の一別本」参照)、同書の性格については疑問視される点がなくもないので、「ひとへ」と読んだ人があつたという資料として一応とりあげるべきだが、絶対的な根拠とするわけには行かずむしろ「イチエ」説をとりたい。

(本学専任講師)